

特別講演 2

「負荷頸静脈法：新たな心不全評価」

パナソニック健康保険組合 松下記念病院副院長 兼 循環器内科部長

川崎 達也 先生

頸静脈の評価は心不全管理に必須である。中心静脈圧が左室充満圧を反映するからである（ベルンハイム効果）。しかし頸静脈評価は臨床現場であまり活用されていない身体所見ではないだろうか。複雑な判定法がその一因かもしれない。従来法の 45 度半座位が可能な状況は限られている。深部静脈である内頸静脈の拍動上縁も明瞭ではないことが多い。そこで近年、頸静脈の座位定性法が普及してきた。座位で右内頸静脈の拍動を視認すれば中心静脈圧は上昇していると判定する。この方法は非常に簡便であるが、軽度～中等度の中心静脈圧の上昇を見逃す可能性がある。よって頸静脈の座位定性法では、吸気による前負荷増大などの負荷を併用することが大切である。この新たな心不全評価法は 2025 年 3 月に改訂された心不全診療ガイドラインにも収載された。典型的な 10 症例を通じてこの技術を学ぶアプリ「シンプル頸静脈」がお役に立てば開発者としてはうれしい限りである。

